様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）
研究期間：2020～2023
課題番号：１９ＫＫ０２９６

研究課題名（和文）民主政アテナイの各種弁論に見られる実践的修辞戦略の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Studies on Rhetoric Strategies in Democratic Athens

研究代表者
佐藤　昇（Sato, Noboru）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：５０５４８６６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,600,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：基課題では古典期アテナイの法廷弁論を中心に分析を行い、司法や宗教、社会的・文化的状況が前4世紀のアテナイの説得文化にどのような影響を与え、いかなるレトリックが成立し、現実の聴衆説得に寄与していたのかについて分析を進めた。その成果を基に本研究では、各種弁論、他ジャンルのレトリックとの比較分析を行った。その結果、法廷と民会で異なる修辞技法が用いられていたことが明らかとなった。また、悲劇や喜劇、歴史叙述といった文学作品は、民会や法廷での演説を描写するに当たり、現実の修辞技法を利用しつつ、各々異なる読者・聴衆を意識し、さらに作者の意図に応じて、実際とは異なる描写を施していたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は古典期アテナイの民主政を、旧来等閑視されてきた演説文化という視点から見直し、実践的修辞戦略という観点から具体的に描き出すものであった。古典期アテナイの法廷や民会が、それぞの環境や歴史的背景に応じて、会衆説得の技法を発展させ、独自の民主政文化を発展させていたことを明らかにした点に、本研究の学術的意義がある。また、アテナイの実践的修辞的技法の多様性と戦略性を明らかにしたことは、民主制の危機が叫ばれる現代において、同時代の政治言説や社会運動を理解する上でも、また今後、熟議的（討議的）民主政治を成熟させていく上でも、有意義な知見を提供することに繋がり、この点に本研究の社会的意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：The previous project analysed the forensic orations in Classical Athens, focusing on how judicial, religious, social and cultural conditions influenced the Athenian culture of persuasion in the 4th century BC, and what rhetoric was established and contributed to audience persuasion. Based on the results of this study, this project conducted a comparative analysis of oratories and descriptions of meetings in various literary genres. The research has revealed that litigants deployed different rhetorical strategies from those of speakers in the Assembly and that literary works such as tragedies, comedies and historiographies, when describing the speeches and meetings in the courtrooms and assemblies, deployed similar rhetoric to the one in forensic and symbouleutic speeches of their contemporaries, to some extent, but that they also used different rhetorical strategies to persuade their respective readers and audiences, according to the author's intentions.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：古代ギリシア　西洋古典　修辞学　レトリック　歴史　文学　歴史叙述　喜劇

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

本研究は基課題の研究を発展させるものである。

前 5～前 4 世紀、古代ギリシアの都市国家アテナイでは民主政が成立し発展した。その特性は種々に指摘できるが、何より市民からなる大規模な会衆を演説（合戦）により説得し、合議に至るという討議的民主制とも称すべき制度が実際に運用されていたところにある。旧来、民主政研究の中核は権力構造や制度分析にあったが（cf. M. Hansen, *Democracy in the age of Demosthenes,* J. Ober, *Mass and Elite*）、このようなアテナイ民主政の性格を理解するには、マスコミュニケーションの一つでもあった演説の発展状況を、具体的に解明する必要がある。

基課題では共同研究者とともに、まず前 5～前 4 世紀、民主政期アテナイの民衆法廷において実際に用いられた修辞技法に注目し、その特性を具体的に解明することで、民主政が文脈に応じた討議と修辞の文化を発展させていた様子を明らかにしてきた。大規模会衆を説得する種々の機会の中でも、一般市民が裁判員を務める法廷では、修辞技法がとりわけ著しい発展を遂げたとされる。無論、訴訟当事者たちは、法廷に集う多数の市民＝裁判員を説得する際、巧みな言辞を弄するばかりではなく、司法制度、宗教儀礼、政治状況等から影響を受けつつ、それらを積極的に織り込んだ修辞を駆使していた。すなわち、民主政を支えた実践的修辞の文化を理解するには、言語的な修辞技法のみならず、同時代の歴史状況を総合的に勘案しなければならない。

だが旧来、修辞分析は文学研究の枠内に留まり、アリストテレスの修辞理論等が主たる分析対象とされていた。たしかに近年、欧米では法廷弁論を対象に修辞の実践的機能を分析する研究が現れ始めた（e.g. Phelan & Rabinowitz, *A Companion to Narrative Theory*; Gagarin, ‘Telling Stories in Athenian Law’; Wohl, *Law’s Cosmos*）が、この新しい研究は二つの問題を抱えていた。(1) 先行研究には、ナラティヴの重要性や特定の修辞技法の有効性を弁論全般に一般化する傾向が強く見られる。演説文化の歴史的特性を正しく理解するには、修辞が実際の弁論ジャンルに応じて、いかに実践的に機能していたのか、検討し直す必要がある。(2) 修辞技法は欧米でも今尚、文学的観点から分析される傾向が強い。しかし実践での修辞は、既述のように、法、宗教儀礼、社会慣行等、歴史的現実の影響を直接的に被り、逆にそれらを利用しながら発展した、歴史的構築物である。こうした問題点を解決するため、基課題では共同研究者とともに、前 4 世紀の法廷弁論にはいかなる修辞技法が用いられ、それが法制度、宗教的慣習、政治状況といかに関係するかについて検討を進めた。この課題はコロナ禍による期間延長を含み、2021 年度末まで継続して行われたが、最終的に同年度末に実施した国際研究集会において、メンバー各自の研究成果を発表し、前 4 世紀の法廷で用いられた実践的修辞技法、修辞戦略の実態を多角的に解明するに至った。ただし、なお口頭報告に留まり、それぞれ分析が不十分な点が見られるなど、さらなる意見交換と精緻化が必要であることも明らかとなった。

また、基課題では研究対象を法廷弁論に限定したが、実際には他のジャンルとの比較対象研究が必要であることも明らかであった。すなわち、法廷特有の修辞技法が発展していたという主張には、例えば民会ではそれとは異なる修辞の技法が発展していたことを主張しなければならない。したがって、基課題の意義をさらに明確にするには、その成果を基にして、民会演説や演示演説などとの比較研究が不可避であった。さらに演説を含むその他の文学ジャンル（悲劇・喜劇、歴史叙述など）では、そうした修辞技法がどのように、どの程度影響を与えていたのか、詳細に分析する必要があった。近年、文学作品はもちろん、歴史叙述においても修辞技法は分析対象となってはいるが、類似性や情報源の共有を指摘するにとどまるものが少なくなく、同時代の修辞技法の影響関係について精緻に分析するものはあまり多くなかった。

２．研究の目的

基課題の目的は、古典期アテナイの演説文化に注目し、その歴史的特性を明らかにすることにより、古典期アテナイの民主政像を新たに構築し直すことにある。基課題の研究では、それら演説文化のうちとりわけ法廷での修辞技法に注目している。史学・法学・文学の知見を総合し、民主政アテナイの法廷で如何なる修辞技法が討議、説得に用いられたのか、ナラティヴ分析の手法を援用し、弁論ジャンルによる差異にも配慮して精緻に分析することで、その歴史的特性の解明を目指す。こちらではメンバー各自が研究を進め、著書・論文を発表した他、（コロナ禍による延期もあったため）2021 年度末に国際学会を開催し、それぞれの成果について口頭発表、意見交換を行なった。以上の研究は国際共著論文集として発表すべく準備中である。このために国際共同研究の期間を利用し、海外の共同研究者とも議論を深め、出版に向けた議論を進めることを、当面の目標の一つとした。

また、本国際共同研究では、法廷における実践的修辞技法と、他の場で享受される弁論作品（民会演説、演示的演説など）に見られる修辞技法との比較研究を行う。とりわけ、基課題でも担当した、聴衆の反応をいかに利用していたかという点を重点的な分析の対象とする。さらに同様の研究視角から、他ジャンルの文学作品に含まれた弁論を分析し、これらに対する法廷・民会演説の影響を分析する。以上の作業を通じて、法廷弁論の実践的修辞技法の特性を明確化すること、そして類似性・影響関係を分析することで、民主政アテナイにおいて発展した演説文化全体の特性を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

目標の一つである基課題研究の成果の出版に向けた準備については、海外の研究者を中心に基

課題の研究メンバーと意見交換を重ねる。この際、共同研究の成果として不足する視点を補うために（１）海外の研究協力者を新たに加え、基課題の研究メンバーとともに研究会を開催し、意見交換を行う。また（２）海外滞在期間を利用し、海外の研究メンバーを中心にディスカッションを重ね、分析の精度を高める。
本国際共同研究に関しては、とりわけ（１）民会演説、（２）演示演説、そして（３）文学作品中に見られる演説を比較対象とし分析を進めることとした。
なお、当初計画では、文学作品よりもむしろ、政治パンフレット的な作品を比較対象に取り上げることとしていた。しかし、歴史叙述や劇、とりわけ喜劇作品の分析の方が、分析可能な事例が多いこと、また作品の背景なども明確で分析しやすいことなどから、後者を主たる分析対象とすることにした。また、当初は法廷弁論の修辞技法の特性を明確化することを主たる目標としていたが、法廷弁論と民会弁論の対照的性格ばかりではなく、相互関係、さらに他ジャンルに与えた複層的な影響関係が明らかになってきたため、この点をより明確にすることも目的に加わった。
具体的には、2020 年度、2021 年度を準備期間とし、各年度中に主たる共同研究者となる Rubinstein 教授、Christos Kremmydas 博士を訪問し、研究打合せを行う予定であった。しかし、事前の渡航はコロナ禍のために断念し、2022 年 10 月に渡航するまでの期間はオンライン会議を通じて意見交換を重ねた。また、基課題の研究成果となる論集に新たに寄稿してもらうこととなった Mike Edward ロンドン大学教授ともオンラインで意見交換を重ねた。同時に国内において関連文献の資料収集を行い、研究状況の把握に努めた。
2022 年 10 月から 2023 年 9 月までの一年間に渡り英国に滞在し、所属機関であるロンドン大学ロイヤルホロウェイ校演説・修辞学研究所（COR）において、Rubinstein 教授、Kremmydas 博士ならびにその他の若い研究者たちとともに、定期的に研究会に参加し、自らも研究報告を行って基課題の研究成果を伝えつつ、海外の研究者の知見も積極的に取り入れ、相互に意見交換を重ねながら、法廷弁論における修辞技法の特性、そして比較研究を通じた民主政アテナイの演説文化の全体像を構築していった。この間、関連史料の調査のために、ロンドン大学古典学研究所図書館を利用した。資料調査、意見交換のためにオックスフォード大学を定期的に訪問したほか、滞在期間中に関連資料を調査するために、2022 年 12 月にウィーン（オーストリア）、2023 年 2 月にエジンバラ（スコットランド）、2023 年 8 月にパレルモ（シチリア）などを訪問し、資料調査や現地の研究者と意見交換を行なった。また 2023 年 1 月には日本に Julia Kindt シドニー大学教授を招聘し、基課題の研究メンバーを中心に研究会を開催し、意見交換を行なった。2023 年 3 月にポルトガルのカトヴィツェ及びクラクフを訪問し、それぞれシレジア大学、ヤゲウォ大学で講演を行うとともに、Jakub Filonik 博士らと意見交換を行なった。さらに 2023 年 6 月にはロンドン大学で開催された COR/ISHR Rhetorical Get Togethers 3.0 に参加し、研究報告を行うとともに参加した欧米各国の研究者と意見交換を行なった。2023 年 7 月にはポルトガル・コインブラ大学で開催された 14th Celtic Conference in Classics に参加し、研究報告を行い、同パネルに参加した欧州各国の研究者と意見交換を行なった。さらに帰国後、2024 年 3 月には、ギリシア・アテネで 5th Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World を共催し、関連する研究報告を行い、招聘した Filonik 博士、Ben Grey 博士（ロンドン大学バークベック校）や Rosalia Hatzilambrou 教授（アテネ国立カポディストリアス大学）をはじめ、各国の研究者と意見交換を重ねた。

４．研究成果
研究成果は大きく、以下の３点に分けることができる。
① 古典期アテナイの法廷演説における実践的修辞の解明
まず、基課題において実施した国際シンポジウムの成果を出版するために議論、理論の精緻化を行なった。シンポジウムでは特に演説者自身の Character の提示方法、演説中に登場する人物の Character の作り方に注目し、社会的現実、宗教的慣行、法制度がそれらにいかに影響を与えていたのか、そして話者や複数の登場人物の Character が相互にいかに関係するのか、状況によりいかに変動するのか、そして一貫した Character 描写に対する限界など、Character 描写を焦点として多角的に分析する研究発表が行われた。この結果を精緻化するために更なる議論を重ね、*Bulletin of Institute of Classical Studies* (London University)の特別号として発表することになった。発表は 2025 年度の予定であり、現在、その編集作業中である。
② 民会演説における実践的修辞の解明
比較対象として第１に挙げられる民会演説について、法廷演説と対照的な修辞技法について具体的に解明することができた。例えば、法廷では野次を抑制する修辞を用いるが、民会演説では野次を抑制するような修辞は用いない。分析の結果、それぞれの場では、それぞれ話者に要求される Character が異なるなど種々の違いが見られ、その結果、修辞技法にも差異が生まれることを明らかにした。また過去の野次に対する言及が、民会ではほぼ見られないのに対し、法廷では頻出し、しかも凡そ肯定的に語られていたことなどが確認された。またさらに現存するデモステネスの民会演説が本人の意向を反映して出版された可能性が高いことなども指摘した。これらの成果はロンドン大学、シレジア大学、クラクフ大学、アテネでの講演会、研究会で口頭報告し、現在、英語論文として執筆中である。そのうちの一つは査読を終え、最終校正段階であり、De Gruyter から出版される *New Companion to Ancient Rhetoric*（仮題）に収録される（2024 年度出版予定）。

③　各種文学ジャンルにおける修辞技法の差異、影響の解明
アリストファネスの喜劇や歴史叙述における修辞技法と法廷・民会演説の関係性を一部解明した。アリストファネスの喜劇には民会や法廷を擬した場面が登場する。こうしたところでは、前4世紀の法廷や民会で用いられた弁論と同様の修辞技法がいくつも用いられていたが、その一方で、劇のストーリー展開に応じて、敢えて、実際の法廷や民会とは異なる修辞技法を用いている点も確認された。したがって、同時代のアテナイ市民にとって、場に応じた修辞技法は、ある程度、定番のものとして固まっていたこと、そしてそれを敢えてずらすことにより喜劇としての可笑み、皮肉が表現され、それも公的言説として共有されていたことが明らかにされた。その成果の一部は14th Celtic Conference in Classicsで発表した。これは今後、さらに研究を深めて論文として発表する予定である。またデモステネスやアイスキネスの法廷弁論とディオドロスやアリアノスといった歴史叙述を比較することで、とりわけ戦争に関する叙述の焦点化の方法が異なることを明らかにした。この点はCOR/ISHR Rhetorical Get Togethers 3.0で口頭報告を行った。
このほか、アテナイ以外を含む古代ギリシアのポリスに関する論考など、関連するトピックに関して論文を執筆し、共著などとして公刊した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Noboru Sato	４．巻 5
２．論文標題 Hellenistic Didyma and the Milesian Past	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japan Studies in Classical Antiquity	６．最初と最後の頁 78-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤昇	４．巻 69
２．論文標題 体育競技への眼差しと軍事ー変わりゆくギリシア世界の中で	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋古典学研究	６．最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ミルコ・カネヴァロ（佐藤昇訳）	４．巻 34
２．論文標題 アテナイ民会における民主的熟議：正当性を得るための手続きと行動	５．発行年 2020年
３．雑誌名 クリオ	６．最初と最後の頁 78-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079644	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Noboru Sato
２．発表標題 Character Portrayal of Corona: People Around the Athenian Law Court
３．学会等名 Seminar at the Institute of Classical Philology of the Jagiellonian University in Krakow（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Noboru Sato
２．発表標題 Rhetorical strategies of referring to thorubos in classical Athens
３．学会等名 at The Institute of Literature of the University of Silesia and the Katowice Branch of the Polish Philological Society（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 野次馬の意義：アッティカ法廷弁論に見られる「場」の修辞的利用
３．学会等名 古代ギリシア文化研究所2021年度年次総会・研究集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 体育競技への眼差しと軍事ー変わりゆくギリシア世界の中でー
３．学会等名 第71回日本西洋古典会大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Noboru SATO
２．発表標題 Character Portrayal of Corona: People Around the Athenian Law court
３．学会等名 International Conference on Character Portrayal of the Attic Forensic Speeches（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計9件

1．著者名 周藤芳幸，長田年弘，師尾晶子，高橋亮介，田澤恵子，佐藤昇，山花京子，安川晴基，芳賀京子，中野智章，桜井万里子，福山祐子，小坂俊介，川本悠紀子，佐藤育子，澤田典子，河江肖剰	4．発行年 2022年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 464
3．書名 古代地中海世界と文化的記憶	

1．著者名 神戸大学人文学研究科，樋口大祐，濱田麻矢，藤澤潤，市原晋平，宮下規久朗，佐藤昇，伊藤隆郎，久山雄甫，佐々木祐，吉川圭太，若狭優，安倍里美，古市晃，梶尾文武，中真生，酒井朋子，茶谷直人，芦津かおり、他	4．発行年 2023年
2．出版社 神戸大学出版会	5．総ページ数 248
3．書名 人文学を解き放つ	

1．著者名 Andreas Markantonatos, Vasileios Liotsakis, Andreas Serafim, Edward M. Harris, Asako Kurihara, Guy Westwood, Noboru Sato, Pasquale, Massimo Pinto, Robert Sullivan, Ioannis N. Perysinakis, David Mirhady, Margarita Sotiriou, Smaro Nikolaidou, Rosalia Hatzilambrou	4．発行年 2022年
2．出版社 De Gruyter	5．総ページ数 306
3．書名 Witnesses and Evidence in Ancient Greek Literature	

1．著者名 Yoshiyuki, Suto, Josine Blok, Andronike K. Makres, Yasuhira Yahei Kanayama, Noboru Sato, Kyoko Sengoku-Haga, Kostas Vlassopoulos, Lilian Karali, Catherine Morgan, Judith M. Barringer, Marion Meyer, Elizabeth A. Meyer, Irad Malkin, Mariko Sakurai, P. J. Rhodes, J. E. Lendon, Akiko Moroo, Hajime Tanaka	4．発行年 2022年
2．出版社 Phoibos Verlag	5．総ページ数 295
3．書名 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World	

1．著者名 デイヴィド・アブラフィア、高山 博、佐藤 昇、藤崎 衛、田瀬 望	4．発行年 2021年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 536
3．書名 地中海と人間―原始・古代から現代まで Ⅰ	

1．著者名 デイヴィド・アブラフィア、高山 博、佐藤 昇、藤崎 衛、田瀬 望	4．発行年 2021年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 512
3．書名 地中海と人間―原始・古代から現代まで Ⅱ	

1．著者名 金澤　周作、藤井　崇、青谷　秀紀、古谷　大輔、坂本　優一郎、小野沢　透	4．発行年 2020年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 340
3．書名 論点・西洋史学	

1．著者名 河江 肖剰、佐藤 悦夫	4．発行年 2021年
2．出版社 グラフィック社	5．総ページ数 160
3．書名 世界のピラミッドWonderland	

１．著者名 デモステネス、佐藤 昇、木曽 明子、吉武 純夫、平田 松吾、半田 勝彦	４．発行年 2020年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 766
３．書名 弁論集 ６（デモステネス）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
	ルビンシュタイン　リナ (Rubinstein Lene)	ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校・古典・哲学学科・教授	
	クレミュダス　クリストス (Kremmydas Christos)	ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校・古典・哲学学科・教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 International Conference on Character Portrayal of the Attic Forensic Speeches	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 The Fifth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Royal Holloway, University of London	University of Oxford	Open University	
ギリシャ	National University of Athens	University of Peloponnese	National Hellenic Research Foundation	